



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ガイト・ガスダーノフ『夜の道路』について : 1930年代の亡命ロシア文学とパリ
Author(s)	望月, 恒子; Mochizuki, Tsuneko
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 132, 45(左)-67(左)
Issue Date	2010-11-15
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44300">https://hdl.handle.net/2115/44300</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS132_006.pdf



## ガイト・ガズダーノフ『夜の道路』について — 1930年代の亡命ロシア文学とパリ —

望 月 恒 子

### はじめに

十月革命後の数年間にロシアを離れた亡命者たちは、1920年頃からベルリン、次いでパリを中心として盛んに文学活動を行うようになった。各種の雑誌や新聞を拠点とするその活動は、1939年の第二次世界大戦勃発、1940年のドイツ軍によるパリ占領で終焉を迎えるまで、ほぼ20年間続けられた。この間の在外ロシア文学を一般に第一次亡命ロシア文学と呼び、第二次世界大戦中から戦争直後の第二次、1970年代以降の第三次亡命ロシア文学と区別している。第一次亡命ロシア文学の作家・詩人たちについては、亡命前に文筆家として名をなしていた「古い世代」と、亡命後に文学活動をはじめた「若い世代」に区分して論じられることが多い。古い世代がブーニン、ザイツェフ、シメリョフらに代表されるとすれば、若い世代の代表としてはナボコフ（ロシア語作家の時代にはシーリンのペンネームを用いていた）、ガズダーノフ、詩人ポプラフスキーらの名が挙げられる。

ソ連ではスターリン時代には亡命文学について言及することすら禁じられていたが、その後の雪解け期から徐々に作品の紹介や研究が行われるようになった。しかし、それは古い世代に限られており、若い世代の作家や作品がロシア国内で紹介されるようになったのは、ベレストロイカ期から1990年代以降のことである。ヴラジーミル・ワルシャフスキーが命名したように、彼らはまさに「見落とされた世代 *незамеченное поколение*」<sup>1</sup>であった。ロシア

国内で作品集が次々に刊行されるようになった現在、第一次亡命ロシア文学の若い世代に関する研究と評価が、ようやく広く本格的に行われるようになった。

本論では、この世代の散文作家を代表するガイト・ガズダーノフを取り上げ、彼の生涯と創作を概観し、長編小説『夜の道路』を例としてこの作家の特徴について考察する。

## 1 ガズダーノフの生涯と作品

### 1.1 生涯

ガイト・ガズダーノフ（1903-1971）は1903年にペテルブルグで、オセツト人の両親の間に生まれた。オセツト人は現在の総人口70万人ほど、カフカス中央部に住む民族で、18世紀からロシアの支配下に入った。ガイトはロシア的な教育を受けた両親のもとで育ち、オセツト語を身につけることはなかった。

20歳でパリにたどり着くまでのガズダーノフの前半生は、ロシア時代も含めて、移動の連続だった。林学の専門家だった父の転勤に伴って、シベリア、ミンスク、トヴェーリ、スモレンスクで短期間ずつ暮らした。1911年に父が死去、その前後に幼い妹たちも失い、家族は母とガイトの二人きりになった。1912年にポルタワの陸軍幼年学校に入学するが、軍の教育になじまず、翌年ハリコフのギムナジウムに入り直した。ギムナジウムで7年次まで終えた1919年、ヴランゲリ将軍が率いる義勇軍（白軍）に加わった。自伝的要素の多い長編『クレールとの夕べ』（1930）の主人公は、「私が白軍をめざしたのは、白軍のテリトリーにいたから、そうするのが当たり前だったからだ。もしも当時キスロヴォーツクが赤軍に占領されていたら、たぶん赤軍に入っただろう」（1,111）<sup>11</sup>と言っているが、これは作家自身の述懐と受けとることができる。

16歳になる少年の偶然とも言える選択が、母との一生の別れ、そして亡命につながった。ガズダーノフが入隊してから約1年間、ヴランゲリ軍は装甲列車でクリミア半島を転戦したが、1920年11月に赤軍とマフノ軍の共同攻

撃を受けて壊滅状態となる。国外への一時撤退を決めた残存部隊の一員として、ガズダーノフはコンスタンチノーブルへ向けて黒海を渡った。126 隻の船に民間人を含めて 15 万人が分乗、コンスタンチノーブル到着後は 10 万の軍勢を 3 カ所に駐留させるという非常に大規模な撤退作戦であった。ガズダーノフを含む 2 万 5 千人は、ガリポリ（ダーダネルス海峡の北にあるガリポリ半島の中心地、現在のゲルボル）に駐留することになった<sup>iii</sup>。白軍のガリポリ駐留は 1 年あまり続いたが、ガズダーノフはその途中でコンスタンチノーブルへ逃亡した。L. Dienes とクラサフチェンコが作成した年譜には、「ガズダーノフは独立不羈の性格のため上官と衝突して、軍法会議にかけられそうになった。彼の父と知り合いだった将校が、逃亡を助けた」とある<sup>iv</sup>。

ハリコフのギムナジウムで 7 年次までで中断していた中等教育を終えるため、コンスタンチノーブルに開校したロシア・ギムナジウムに入学。同校はまもなくブルガリアのシューメンに移転したので、ガズダーノフは 1923 年にシューメンでギムナジウムの 8 年次の課程を終えた。16 歳になる直前に白軍に志願して以来、絶え間ない移動と戦闘の中で多すぎる死を見てきたガズダーノフは、シューメンですぐれた教師や友人に恵まれて、わずか 1 年ではあるが穏やかな学びの生活を送ることができた。ギムナジウムを大海に浮かぶ島に例え、その生活を回顧した佳品『島で На острове』（1932）がある。

1923 年の末にパリに到着。最初の 5 年間、生活は困窮した。荷役作業、機関車洗淨、自動車製造など、身寄りも庇護者もない 20 歳の亡命者として可能な限りの肉体労働を試みた。フランス人にロシア語を、ロシア人にフランス語を教えるというお定まりの家庭教師もやり、それでもなお 1925 年から 26 年にかけての冬は仕事を見つけられず、3 カ月をホームレスとして過ごした。1928 年に夜間専門のタクシー運転手になり、はじめて持続的な職業を持つことができた。1952 年まで 25 年間続いたタクシー運転手時代については、小説『夜の道路』との関連で、後述する。

1926 年から小説を発表し始める。1930 年に発表した初の長編小説『クレールとの夕べ』により、亡命ロシア文学の有望な新人として注目された。1920 年代の末にソルボンヌに入学、4 年間文学史や社会学を学んだが、卒業

はしなかった。1932年にフリーメーソンのロッジ「北方の星」に加入。終生このロッジで活動し、1961年に最高の位階「親方（マスター）」に達した<sup>v</sup>。戦時中はレジスタンス運動に参加して、捕虜収容所から脱出したソ連兵士から成るパルチザンのためのロシア語パンフレットを編集した。この経験について戦後に『フランスの地で』（1946）を発表した<sup>vi</sup>。

1953年に、アメリカ合衆国議会の資金提供によりミュンヘンに設立された放送局「ラジオ・リバティ」に就職して、西ドイツのミュンヘンに移住した。1959-1967年はラジオ・リバティのパリ支局に勤務。その後ミュンヘンに戻り、1971年に死去した。

以上概略したように、ロシア革命、両大戦間期の世界状況、第二次世界大戦、戦後の冷戦といった20世紀の歴史の変動は、ガズダーノフ個人の生と深く結びついていた。彼は巨大な歴史の渦に巻き込まれ、10代半ばから一人で生きていかねばならなかった。「オセツの家庭の出身で、精神はペテルブルグっ子、若くして内戦と追放の悲劇を経験した白軍兵士、亡命後は乞食、肉体労働者、夜間タクシー運転手、レジスタンス運動の参加者、ラジオ・リバティの職員」<sup>vii</sup>、なおかつフリーメーソンであり作家であったガズダーノフは、亡命ロシアというユニークな現象を象徴するような多層的な生涯を送った。

## 1.2 作品

ガズダーノフが残した作品は、中・長編が9編、短編が40編あまりである<sup>viii</sup>。1926年に短編『未来のホテル Гостиница грядущего』がプラハの雑誌「己れの道を Своими путями」に発表された。これが最初の雑誌掲載である。翌1927年から1931年にかけて、やはりプラハで発行されていた「ロシアの意志 Воля России」に短編9編を発表した。亡命ロシア文学界では、パリで1920年から発行されていた「現代雑記 Современные записки」が最も権威ある雑誌だったが、この雑誌は第一次亡命の古い世代の作品を熱心に掲載し、20年代後半に台頭してきた若い世代には最初は扉を閉ざしていた。それと対照的に、マルク・スローニムが編集者を務める「ロシアの意志」には、

積極的に若い世代を育てる姿勢が見られた。ガズダーノフはパリに住みながら、第2作『三つの失敗の物語 Повесть о трех неудачах』以後の作品を立て続けに「ロシアの意志」に発表し、それらの作品によって作家としての地歩を固めていった。1930年に発表した長編『クレールとの夕べ Вечер у Клэр』が大きな評判を呼び、ガズダーノフはシーリン（ナボコフ）と共に最も有望な新人と目されることになった。この年に雑誌「数 Числа」創刊号に発表された短編『水の牢獄 Воляная тюрьма』も高く評価されて、1930年は作家ガズダーノフにとって非常に充実した年となった。

ガズダーノフの作品は、特に前期には明瞭な筋書きのないものが多いが、『クレールとの夕べ』と『水の牢獄』もその例に漏れない。どちらも一人称の語り手が、区切れの少ない息の長い文章で、意識が移ろうままに様々なことについて語り続ける。『クレールとの夕べ』の主人公は、革命前に知り合ってパリで10年ぶりに再会した女性クレールと夕べを過ごしつつ、ロシアでの幼年時代、幼時に経験した父の死、16歳になる前に決めた白軍への参加、内戦中のできごとなど、これまで自分が経験した多くのことを想起する。一貫した筋書きはないが、個々の情景は生き生きと伝えられ、そこに登場する澁刺とした父親や知的でシニカルなヴィタリー叔父などが鮮やかな像を結ぶ。この作品は、ごく若いときにロシアを離れ、守るべきロシアのイメージやロシアへのノスタルジーを創造の核としない、若い亡命者の文学の誕生を強く印象づけるものであった。この一作によってガズダーノフは若い世代の代表としてナボコフと並び称されるようになるが、そのナボコフが1935年に発表した『重い煙 Тяжелый дым』（英語訳『動かぬ煙 Torpid Smoke』1973）に、『クレールとの夕べ』に関する言及がある。亡命先のベルリンでロシア語の詩を書いている青年が自分の本棚に目をやると、「たまたま手に入れたくだらない本」や教科書などと共に、「いろんな時期に心を躍らせた、お気に入りの本」が並んでいる。亡命ロシア人が読者であった1935年のロシア語版では、本の題だけ挙げられていたが、1973年の英語版では、英語圏の読者にもわかりやすいように作者名などが付け加えられている。下の引用で（ ）に入れたのが、英語版で付け加えられた説明である。青年のお気に入りには次のような本

である。

(グミリヨフの詩集)『天幕』, (パステルナークの)『わが妹人生』, (ガズダーノフの)『クレールとの夕べ』, (ラディゲの)『ドルジェル伯の舞踏会』, (シーリンの)『ルージン・ディフェンス』, (イリフとペトロフの)『十二の椅子』, ホフマン, ヘルダーリン, バラトゥインスキー, そして古いロシアのベデカー (旅行案内)。<sup>ix</sup>

ここでナボコフ (シーリン) は独特のしゃれっ気を発揮して、自作の『ルージン・ディフェンス』(1929-30) を登場人物の愛読書の中にしのばせているが、それと並んで同時代の亡命ロシア文学の中からはガズダーノフの一作を選んで注目に値する。『クレールとの夕べ』は、詩人志望の青年の繊細な美感にかなう作品と見なされているのだ。

『クレールとの夕べ』では語り手が記憶を語るが、短編『水の牢獄』の語り手は自分の過去を語らず、現在についても説明しない。自分が居住するパリの小ホテルの主人夫妻や近隣の住人のこと、アルバイト先の女主人のこと、彼女の家の訪問客たちのことなどが語られる。何も事件らしい事件は起こらず、筋書きの展開がなく、人物についても断片的な描写しかない作品の中で、全体を通して強く浮かび上がってくるのは、語り手の閉塞状況である。作品は以下のようにはじまる。

オデオン座近くにあるホテルに、一年間パリの向こう端で暮らした私が帰ってみると、私の不在の間に何も変わっていなかった。相変わらずギリシア人の大学生の部屋では蓄音機が鳴り響き、相変わらず私のもう一人の隣人であるウィーン出身の若い男は、一年前と同様に静かに酔っぱらい、相変わらずホテルの主人は近くのカフェで遊び、あたふたとカードを切って、妻にもらう少額の金を賭けては負けていた。(3,154)

3人の人物の説明をそれぞれ「相変わらず по-прежнему」という副詞では

じめ、その間に「一年前と同様に как в прошлом году」という副詞句まで挿んで、語り手はホテルの変化のなさを強調する。そして語り手自身の状況にも変化は見られない。

ホテルに戻ってきて、私は一年前とまったく変わらぬ暮らしを始めた。以前と同様に私は何もせず、明日の自分がどうなるのか知らなかった。ポケットは空っぽで、耳の中では、ずっと前にいろいろな場所で聞いた遠くの海の音楽的な波の響きが、途切れることなく鳴り続けていた。(3,158)

一年間の不在の理由は明らかにされず、ただ状況の変化のなさが告げられ、出口のなさが強調される。それを象徴するのが、作品の題にもなっている「水の牢獄」に閉じ込められた「水の囚人」のイメージである。

がんばって目を閉じないでいると、私の部屋を満たしているすべてのものが生き返り、存在しはじめるのが見えてくる。不可解な光が戸棚の鏡の表面をさっと走り、机の上に置いた本のページがめくれ、洗面台の大理石の船が闇の中を航行し、その洗面台の湯の蛇口と水の蛇口の間にある楕円形の網の向こう側に、水の囚人の顔がちらちらと見える。一年前に私がここに置き去りにして、今度帰ってきたとき、相変わらず水の牢獄の中にいるのを見つけた囚人だ。昼間でも、鉄格子のついた舷窓を思わせる楕円形の小窓に偶然目がいくと、小さな姿が格子の棒にしがみついて、懇願するように私の方を見ているのが見えるような気がする。(3,159)

ホテルの部屋の洗面台、その二つの蛇口の間排水孔を覆う網、そこに閉じ込められた囚人の小さな白い顔。具体的な背景の中に書き込まれたグロテスクな小人の像は、断片的にしか書かれない登場人物たちを後景に押しやるような強いインパクトがある。この小人は作品の最後で数百倍の大きさに膨

張し、胸に「水の牢獄の長」と書かれた白衣を着た人間の姿になる。そして語り手は幻想の中でピアノの演奏を聴きながら、こんな感じに襲われる。

音楽はずっと続いていた。そして私は、もうこの水の牢獄からは逃げられない、私はここに、丸窓の中に、洗面台の鉄格子の中に、私の囚人のように、永遠に留まるのだと感じた。(3,172)

これは主人公が窓を閉め忘れて寝こんでしまい、窓から雨が降り込んだために見た悪夢だという短い謎解きの部分があって、作品は終わる。

この作品には、「長いあいだひとりしていると、われわれは空虚を幽霊たちで一杯にする」(小佐井伸二訳)<sup>x</sup>というエピグラフがついている。モーパッサンの日記体の中編小説『オルラ』(1886)から取られたこの一節は、『水の牢獄』の内容を見事に要約して表している。排水孔の網が鉄格子の役をはたす「水の牢獄」に閉じ込められた「水の囚人」は、まさに主人公が「長いあいだひとりで」いたために空虚の中に生み出された幽霊である。サイズが小さいためにグロテスクさが際立つその姿は、夜には外からの灯りで全体に緑っぽく見える小部屋に住む主人公の像と重なり合い、彼の孤独と閉塞状況のユニークな象徴となり得ている。ガズダーノフ作品集の編者が、「批評家たちの共通の意見は、これがガズダーノフの最良の短編だということに落ち着いた」<sup>xi</sup>とこの作品の解説に書いているのは、当を得ていると思われる。

ガズダーノフは1931年に、短編『リカルディの失踪 Исчезновение Рикарди』を「現代雑記」に発表した。若い世代からナボコフに次いで亡命ロシア社会で権威ある雑誌に迎えられ、以後10年間、この「現代雑記」を主な掲載誌として作品を発表した。指標として長編だけを取り上げれば、『ある旅の物語 История одного путешествия』は1934-35年に発表された。1939年に『飛行 Полет』と『夜の道路 Ночные дороги』の雑誌掲載が始まったが(前者は「ロシア雑記」、後者は「現代雑記」に掲載された)、第二次大戦勃発に伴ってどちらの雑誌も廃刊になったため、2作の発表は中断された。ヨーロッパで展開していた第一次亡命ロシア文学は、この時期に終焉を迎えたのであ

る。『夜の道路』は1941年に書き上げられ、1952年に単行本として発行されたが、『飛行』の全体が刊行されるには、作家の死後20年以上たった1992年まで待たねばならなかった。

ガズダーノフは第二次大戦後も創作を続けた。後期は長編が中心になり、『アレクサンドル・ヴォルフの亡霊 Призрак Александра Вольфа』(1947-48)、『仏陀の帰還 Возвращение Будды』(1949-50)、『巡礼 Пилигримы』(1953-54)を、すべてニューヨークの「新しい雑誌 Новый журнал」に発表した。1953年にラジオ・リバティでの仕事に就いた後にしばらく作品の量が減少したが、60年代後半から長編2作『覚醒 Пробуждение』(1965-66)、『エヴェリーヌと友人たち Эвелина и ее друзья』(1968-71)を発表した。『アレクサンドル・ヴォルフの亡霊』は数カ国語に翻訳されたものの、概して戦後の作品はほとんど論評されなかった。アメリカの研究者 L. Dienes は、1996年に次のように書いている。

1930年代初頭にめくるめくような賞賛を受けた後、残りの生涯に渡ってガズダーノフを待ち受けていたのは、彼の創作に対する批評家たちの軽視、または完全な黙殺であった。1930年代の中頃には批評家たちはまだ何とかガズダーノフを賞賛していたが、その賞賛はほとんどいつも、どっちつかずの曖昧なものだった（それは時には否定されるより悪かった）。だが1940年代以降、作家のまわりには「デッドゾーン」が形成された。最後の20年間、亡命ロシアの批評は彼についてほぼ完全に沈黙した。最後の三つの長編には一つも反応がなかった（1953-1971）！ ただの一つも！ 戦後に書かれた短編全体に対して、ごく小さな書評が三つ出ただけである<sup>xii</sup>。

Dienes はハーバードでの大学院時代からガズダーノフの小説の面白さに夢中になり、1977年にこの作家に関する博士論文を提出、それを基にした研究書を1982年に上梓した人である。世界でいち早くガズダーノフ研究の先鞭をつけた Dienes にとって、作家存命中から作品が無視されるようにな

り、20世紀が終わる頃になっても、「まじめな分析も、真に広範な認知も、まだ先のことである」(1, 12)という状況は、実に心外なことだったのだろう。

前述の通り、1930年代の亡命ロシア文学界では、若手散文作家のうちナポコフとガズダーノフの二人が注目され、将来を嘱望されていた。ところが、英語作家の道を選んだナポコフが、『ロリータ』の成功(1955)を契機に世界的な名声を得たのに対して、ロシア語で書き続けたガズダーノフの作品は全く世界の知る所とならなかった。それは第一次亡命ロシア文学が1940年頃に終焉したことと関係するのはもちろんであるが、それだけが理由であろうか。ガズダーノフが書き続けた作品の内容とも関係するのではないかという疑問も起きる。後期長編を分析して、この疑問に答える試みは、本論の目的には含まれない。ただ、彼の創作全体を概観するこの節で、後期の特徴を指摘するに留めたい。

ガズダーノフの作品には、登場人物の運命が偶然のできごとに左右されるという特徴がある。彼の創る世界では人の意志や願望は結局は何の意味も持たないのではないかとさえ思わせるほど、登場人物の人生が偶然のできごとによって大きく変わることは、前期作品からしばしば見られた。たとえば長編『飛行』の結末では、息子が自殺を図ったという知らせを受けた父親は、妻の妹などとともにパリから飛行機でロンドンへ向かう。だが飛行機は事故で墜落し、その飛行機に乗り遅れた母親だけが、命をとりとめた息子のもとに駆けつけることになる。また短編『リカルディの失踪』では、人気の絶頂にある世界的バリトン歌手リカルディが、突然ハンセン病の宣告を受ける。『幸福 Счастье』(1932)では、成功している実業家アンリ・ドーレンが、車の事故で失明する<sup>xiii</sup>。このような偶然性の要素は後期にも受け継がれる。それに加えて後期には、作品にモラリスティックな傾向が加わる。たとえば『巡礼』では、金持ちの青年が偶然に通るかかった街角で、はじめて売春の客を取らされる少女に声をかけられ、ただちに少女をヒモの見張っている場所から連れ去り、結局は純愛の結果、少女を悲惨な境遇から救い出す。『覚醒』では、数年ぶりに偶然に出くわした学生時代の友人に誘われて田舎に出かけた

青年が、森で動物同然に生きている女に会って、彼女をパリに連れ帰り、彼女に知性と記憶を取り戻してやることに全力を傾ける。どちらの作品でも、救った男と救われた女は心から愛しあうようになり、結婚するに至る。偶然性と道徳性の要素が強く支配するガズダーノフの後期作品は、20世紀後半の世界文学の中では異質なものという印象を受ける。T. クラサフチェンコは、その印象を次のように解釈した。

たとえば『巡礼』(1950, 発表 1953-54)を読むと、啞然としてしまう。これじゃ立派な社会主義リアリズムだ。売春婦が愛の力で、繊細で教養ある立派な令嬢に生まれ変わる。売春婦のヒモをしている犯罪者が精神の危機を経験して、自分から「フランスのマカレンコ」<sup>xiv</sup>に教えを請い、自分を再教育して、人々の役に立つ人間になる。これは真のユートピアである。ただし、このユートピアを解くコードは、共産主義ではなくフリーメーソンのコードなのだ。フリーメーソンは、ガズダーノフの人生において重要な(目にはつかない)役割を、彼の創作においては目にも明らかな役割を果たした<sup>xv</sup>。

ガズダーノフは30年代以降ずっと熱心にフリーメーソンのロッジで活動したが、フリーメーソンが秘密組織である以上、彼の人生におけるフリーメーソンの役割は「重要な(目にはつかない)」ものでなければならなかった。だが文学においては、フリーメーソンの立場を明らかにしなくても、その精神や信念を作品で説くことは可能であった。その意味で、ガズダーノフの創作におけるフリーメーソンの役割は「目にも明らかな」ものであると、クラサフチェンコは言う。彼によれば、社会主義リアリズムの文学とガズダーノフの文学は、理想に基づいて現実を見る点において共通しており、ただ両者のめざすユートピアの質に違いがある。「ガズダーノフは結局、社会的ユートピアに対して個人的ユートピアを提示している」と、クラサフチェンコは述べている<sup>xvi</sup>。

クラサフチェンコも例に挙げた『巡礼』が、戦後のガズダーノフの特徴を

もっとも明瞭に表していると言えるだろう。前半で主な筋として語られるのは、資産家の息子ロベールが、少女ジャニーヌを売春婦になる運命から救出し、結婚する物語である。ガズダーノフはこの二人以外の登場人物にも、人生の急激な変化を経験させる。その中の一人、ジャニーヌに売春をさせようとしていたフレッドの生き方の変化は特に詳しく語られ、それが後半の中心的な筋となる。売春婦のヒモとして数人の女に稼がせ、小さな犯罪にも手を染めながら生きてきた小悪党フレッドは、若年犯罪者の更生に手を貸しているロジェの助けを借りて、まさに生まれ変わる。ロジェに連れてこられた森の中の家で、ひとり読書や思索の日々を送っていた彼は、あるとき偶然に、薬草を用いて人々の病気を治す高名な老人と出会い、彼の弟子になって、スイスに住み着くのだ。

ところが作品の最後で、フレッドは山道で落石のために死んでしまう。晴れ渡った夕方、通り馴れた道をたどって家へと向かいながら（つまり、事故の予兆は何一つない状況で）、フレッドは現在の自分を作ってくれたロジェの言葉を思い起こす——「こういう人々を助けなくちゃならない。私個人にとっては、このことに人間の活動の意味がある。人間の大部分は哀れんでやらなくちゃならない。このことの上に世界は築かれるべきだ」(2,431)。こんな言葉を思い起こしつつ、フレッドはロジェの信頼に応えるために全力を尽くそうと思う。しかし、その思いを実現するための時間は彼には与えられておらず、落石による地崩れのため、彼が歩いていた箇所まで小道が崩れ落ちる。

彼の遺骸は数日後に引き上げられた。体は打ち砕かれ、手足は折れていたが、顔には損傷がなく、死んだ目は何も見ずにまっすぐに前方へ——彼がそこから出現し、物言わぬ冷たい闇の中で再び彼の上で閉じた、あの虚無へと、向けられていた。(2,432)

「兄弟愛、救済、真理」<sup>xvii</sup> というフリーメーソンの教義と深く関係すると思われるモラリスティックな調子、登場人物の運命が個人の意志よりも偶然に決定される度合いが大きい傾向、これらはどちらも戦前からガズダーノフに

見られたものだが、後期長編ではより明瞭に表現されている。

ガズダーノフ研究にはまだそれほどの蓄積がある訳ではないが、これまでは第一次亡命ロシア文学がヨーロッパで存続していた1930年代の作品について論じられることが多かった。第二次大戦後の作品については、フリーメーソンの思想とも関連させてガズダーノフの創作全体との関係で捉えるとともに、1945年以降の在外ロシア文学の在り方のなかで考えることが必要になってくるであろう。

## 2 長編小説『夜の道路』

ガズダーノフの長編第一作『クレールとの夕べ』は、1人称で書かれた。語り手「私」の幼時や革命前後の思い出、内戦の記憶は、ガズダーノフの経験と一致しており、語り手は作家自身と重なる部分の多い存在である。次の長編『ある旅の物語』と『飛行』は、3人称で書かれた。その登場人物は生活の苦労とは無縁の富裕な人々であり、当時の作家自身とはかけ離れた生活が描かれている。G. ストルーヴェは、「ガズダーノフの長編ではほとんどいつも、ロシア亡命者とは対極的な、お金持ちで美男美女で上品で魅力的な外国人が登場すると、ある批評家が指摘した」<sup>xviii</sup>と、少々辛辣に述べている。『ある旅の物語』と『飛行』は、この指摘にあてはまる。

『夜の道路』でガズダーノフは再び1人称の語りに戻った。この作品も『クレールとの夕べ』と同様に自伝的要素が多く、語り手はガズダーノフ自身と重なる部分が多い。パリに来てから様々な肉体労働を経験して辛酸を嘗め、最後にタクシー運転手に落ち着いたという経歴は、作家自身と同じである。また教養の高さ、人間への関心の持ち方、さらには酒を飲まないことまで含めた暮らし方全般も、ガズダーノフと重なる。『クレールとの夕べ』からほぼ10年たって、作家は再び等身大の自分を語り手として、自分の生活とほど遠い華麗な世界ではなく、自分の目でいやというほど見てきた夜のパリを描いた。

『夜の道路』をガズダーノフの作品の中で「最良の作品」<sup>xix</sup>、もしくは「最

良の作品の一つ」<sup>xx</sup>とみなす意見がある。確かにこの作品は、「夜間専門のタクシー運転手」という具体的な視点を設定して1930年代のパリを生き生きと描き出し、内容の面白さとガズダーノフ独特の文体が融合して、ユニークな世界を作り上げている。視点の設定、つまり語り手の設定がこの作品の大きな特色になっているので、本章では語り手の像を中心に検討してみたい。

作品中で固有の名を与えられていない語り手は、ロシアからの亡命者である。パリへの亡命者でタクシー運転手になる者が多かったことは、よく知られている。エレヌ・メネガルドは著書『パリのロシア人 1919年-1939年』において、「(パリの) 街の風景の中にロシア人が含まれることは、彼らが大量にタクシー運転手の職業に就いたために目につくようになった」<sup>xxi</sup>と述べた。彼女によれば、両大戦間期のパリにおいてロシア人タクシー運転手は、モンマルトルの街頭画家やアパルトマンの門番などと同様に、パリ生活に欠かせない、パリ特有の「タイプ」であった<sup>xxii</sup>。フォードの考案した流れ作業による大量生産方式が採用され、ヨーロッパでも1920年代半ばには自動車が一気に大衆化し始めた。20年代のロシアからの亡命者の多くが自動車工場での労働や運転手など、自動車に関わる職業についたのは、こうした職業の需要の急増と大いに関係していた。中でもパリのタクシー運転手が亡命者たちの憧れの職業になった要因として、メネガルドは次の点を挙げた。まずロシア・ディアスポラの首都パリならば、誰にも多くの友人と知り合いがいて相互扶助のシステムがあったこと、この職業ではある程度の独立と自由が可能であったこと(労働時間中にはボスはおらず、労働時間も選ぶことができた)、さらに様々な層のフランス人と知り合うことができる等の点である。希望者がタクシー運転手の資格を取得できるよう、亡命者社会では講習を開いたりロシア語の教習本を出版したりして、支援する制度もあった<sup>xxiii</sup>。

『夜の道路』の語り手も、自ら望んでタクシー運転手になっている。「私はその前に労働者、それから学生、それから勤め人をやり、それからロシア語とフランス語を教えた。そしてこれらの仕事が私にとっては完全に取るに足りないということがはっきりしてから、パリの道路知識の試験と運転免許の試験を受けて合格し、必要な書類を手にした」(1,485)と彼は語る。十分な

体力があつて荷役などの重労働はこなせたのに、労働者との共同生活に2週間しか耐えられなかった語り手にとって、運転手という職業で保証されるある程度の独立と自由は、非常に重要であつたと思わせる記述がいくつか見られる。しかし、語り手は自分の職業に満足はしていない。それどころか嫌悪感を表すこともある。まず、「夜のパリの住人は昼間とはまったく異なり、その本性や職業からいって大抵は破滅の運命にあるいくつかのカテゴリーの連中から成り立っていた」(1,465)という状況がある。その上に、タクシーの乗客は1回だけ出会うにすぎない運転手に対しては何も遠慮しないという要素が加わる。そのため運転手はタクシーの客を、「客たちが自分で見せたい姿ではなく、彼らのありのままの姿で見る」(1,466)ことになり、結果として人間の悪い面を見せつけられる。自分が運転手として経験したことの半分だけでも、「何人もの人生を永久に損なうに足りる」(1,485)ほど多くの嫌なことを見聞きしたと彼は言う。ガズダーノフが革命直後のロシアの内戦でどんなに多くの恐怖、嫌悪、戦慄を経験したか、我々は『クレールとの夕べ』その他の作品から知ることができる。ところが、『夜の道路』の語り手は、パリの深夜タクシーの運転手として見た世界は、「そのおぞましさにおいて、善なるものが欠如している点において」(1,465)、いかなる内戦経験とも比べものにならないほどひどい、というのである。

『夜の道路』のフランス語への翻訳者エレーヌ・バルザモは、この小説の作者の視線は自然主義的であると述べている<sup>xxiv</sup>。語り手はタクシーの乗客や自分と同じロシアからの亡命者たちの他に、夜のパリの主な住人たち——乞食、浮浪者、売春婦、ヒモ、アルコール中毒者、娼家を訪ねる客などを描く。パリの表の顔が華麗であればあるほど、深夜タクシーの運転手が見る裏の顔は、暗い醜いものになる。パリの街もタクシーの客たちと同様に、「自分で見せたい姿ではなく、ありのままの姿」を運転手の前にさらけ出すのだ。この語り手の視線には、確かに自然主義的という語にふさわしいものがある。たとえば乞食について彼はこのように述べる。

パリで、パリの夜の道路で、私ははじめて、同情を呼び起こさない乞

食を見た。こんなではいけない、これほどまで冷酷になってはいけないとどんなに自分に言い聞かせても、彼らの様子は私に嫌悪しか呼び起こさず、私は自分でもどうすることもできなかった。(1,494)

彼は様々な種類・階層の人々、あるいは個人に、このようなある意味で冷酷な視線を向けるが、彼がもっとも軽蔑的に語るのは、売春婦に稼がせて生活する、いわゆる「ヒモ」たちのことである。

浮浪者は、悲劇的で動物的な虚無の中にいるけれども、ヒモたちと比べると、この宇宙にふさわしい市民であると私には思えた。ともかく浮浪者は、たとえ理論上だろうと同情には値するし、彼らの中にはヒモに特徴的な道徳的梅毒はなかった。私は毎晩目にする、つまり独特の服を着た哀れな女たちと、カフェで明日の競馬レースの予想や馬の品定めをしながら、彼女たちを待っている連れの男たちには、どうしても慣れることができなかった。(1,573)

ここで使われている「私は慣れることができなかった」は、作品中で何回か繰り返される表現である。バルザモは、この作品では「私は肩をすくめた」と「私は慣れることができなかった」の二つの表現がリフレインのように響いて、無関心と憤慨という対極的な二つの気分を伝えると述べている<sup>xxv</sup>。夜のパリには、語り手がどうしても慣れることができないもの、憤慨を露にせずにはいられないものがいくつもある。彼は売春婦、その客たち、ヒモたちに慣れることができない(1,573)。パリでの生活には、「海、森、川、ありとあらゆる無数の匂い、しなやかに揺れる枝、ゆっくりと舞う木の葉」などが失われていることにも、慣れることができない(1,636)。さらに、商売人でも勤め人でも労働者でもその大部分が、抽象的思考が欠如しているために、その目におとなしい鈍い表情を浮かべていることにも、慣れることができない(1,636)。語り手が繰り返す「私は慣れることができなかった」という言葉には、怒り、抗議、生理的嫌悪などが込められ、何度繰り返されても激し

く強く響く。

語り手がどうしても慣れることができないものとして、周囲の人々の「目の光の鈍さ」、それが示している「精神的貧しさ」(1,636)も挙げられている。これは、彼が知識人であり、夜のパリや労働者のパリを構成する人々に対して他者であるために感じることだろう。語り手は、パリに来て労働者として働いていたとき、大学に行きたいという意志を周囲の労働者たちにどうしても理解してもらえなかったことを書いている(1,486)。彼がギムナジウムを卒業して中等教育修了証を持っており、大学入学の資格があることすら、彼らにはよく理解できない。タクシー運転手を自分と同等の人間として扱わない上流社会の人々と違って、労働者と主人公の関係は常に良好だった(1,486)、それでも主人公が労働者の仲間ではないこと、他者であることには変わりがなかった。

語り手は外国人であることによって、もう一つの他者性を付与されている。語り手のフランス語の能力は非常に高く、絶対に外国人とは思えないと知り合いのフランス人たちが舌を巻くほどだ。しかし、彼はタクシーの客に「あなたは外国人か」と尋ねられることがある。それは、フランス人運転手ならば文句を言わないはずの要求に、彼がどうしても従わない場合である。たとえば、タクシーが目的地に到着したとき、「お願いします」の一言さえつけずに、5個のトランクを5階まで運ぶように命じた紳士に、彼は「あなたは腕が麻痺してるわけじゃないんでしょう？」と尋ねる。質問の意味がくみ取れない客に、「どうして私が5階まで、いや何階だろうと、あなたのトランクを運ぶのかかわからない。仮に私がタイヤを交換するとしたら、私の代わりにあなたにやってくれと頼むとは、まさか思わないでしょう」と付け加え、相手を仰天させる。客の理不尽な要求や横柄極まる物言いに、タクシー運転手が自分としては全くノーマルな口調で、つまり対等な物言いで異議を申し立てるとき、フランスの上流社会の人々は決まって、「あなたは外国人か」、あるいは「あなたはロシア人か」と尋ねるのである。

この問いに彼は「いいえ」と答えるのが常で、生まれた場所としてパリの通りと番地さえ挙げてみせることもある。こうして平然と嘘をつくのは、彼

がロシア人であることが判明したとたんに、すべてが落ちついてしまうことへの抗議と受けとれる。「私はどこでもこれほど間近に、激しい社会格差を見る機会がなかった。それに、何ととっても、人々が自分の境遇をこんなにも安々と受け入れているのも見たことがなかった。私はどうしてもこれに慣れることができなかった。ここにあと50年暮らしても、これは変わらないだろうと私は感じた」(1,603)と言っている。夜のパリを見つめるガズダーノフの視線には、醜悪な現実を醜悪なままに見る自然主義的な要素の他に、外国人ならではの鋭さに基づく「異化」の要素も強く作用している。メネガルドが述べたように、亡命者にとってタクシー運転手という職業が、様々な階層の人々との接触を可能にするという意味で魅力があったことは事実であろう。しかし、それは同時に、根強い階級社会というフランスの本質的な一面を実感させ、自分がフランス社会で永遠に他者であることを認識させる職業でもあった。

作品『夜の道路』のかなりの部分は、パリ市内のあるカフェに集まる人々やそこでのできごとの描写に当てられている。「私は夜のパリで、異なる自然環境の中に入り込んだ旅人のような気がしていた」(1,538)と語り手は自分の疎外感を語るが、そんな彼にもささやかな落ち着き場所があった。それがある駅の向かいにあるカフェで、語り手は客が途絶える午前4時頃にタクシーを駅に停めて、このカフェで数時間過ごすことがあるのだ。彼はカフェを「暗い海の中の明るく照らされた島」に例え、自分をその島に着く「小舟の漕ぎ手」に例える(1,538)。売春婦やヒモのたまり場になっているカフェで、お酒を飲まない彼は必ずミルクを注文し、ひとりの常連客と話をする。その客は教養が高く、他の客には通じない哲学的な話をするので、「プラトン」と呼ばれている。長編『夜の道路』は、主人公の「私」がパリで見聞きしたことや考えたことをプラトンに語り、その反応を手がかりに経験を反芻して、複合的なパリ像を作っていく物語であるとさえ言えるほどに、二人はよく長い話をする。

語り手はある夜、路上でラルディという女と知り合いになる。若いときはヨーロッパ各国の貴族や富豪の愛人になって高級娼婦として名を馳せた

が、今は落ちぶれて街頭で客を引いている老女である。語り手の周囲では彼女とプラトンだけがまともなフランス語をしゃべり、文学や芝居の話ができる。そのラルディの人生についても語り手はプラトンと語り合うのだが、その場面に次の一節がある。

私は普段は誰とも話しあったりしないことがらについて、はじめてプラトンに語った。もしもプラトンが、ラルディと同様に、あの虚無の中にいるのでなければ——幻影じみた偽りの外見とは言え、本物の人生の外見を保っている虚無、沈黙や打算がとっくに何の意味も持たなくなっている、あの虚無の中にプラトンがいるのでなければ、私はたぶん彼にこのことを話したりしなかつただろう。(1,511)

本物の人生のような外見をしているが、実はその外見は幻影であり偽りである「虚無」もしくは「非在」(небытие)——ラルディもプラトンもその世界の住人であり、だからこそ自分はプラトンを相手にラルディの話ができるのだと、語り手は言う。それならば、<sup>しらふ</sup>素面に近いときのプラトンを格好の話し相手とし、ラルディとも心を通い合わせる語り手もまた、その虚無の世界の住人であるとは言えないだろうか。

プラトンは、夜のパリで語り手が同じレベルで話ができる唯一の相手である。二人が言及する哲学者や文学者、音楽家などは、ギリシア・ローマの古典古代から現代まで非常に広範囲に亙る。プラトン、アリストテレス、デカルト、パスカル、ニーチェについて、シラー、ゲーテ、シェイクスピア、ディケンズ、ポーについて、フローベール、モーパッサン、バルザック、スタンダールについて二人は語り合う。その語り合いによって、この小説には形而上的な層が生まれている。E. プロスクリナは、ガズダーノフの長編小説の創作手法に関する研究書において、作品『夜の道路』の構造には「ルポルタージュの層と叙情詩の層」があると指摘した<sup>xxvi</sup>。プロスクリナの「叙情詩的」という定義には異論もあり得ようが、夜のパリの人間模様を描き出すルポルタージュ的な層の他に、この作品には少なくとももう一つの層が存在するの

は確かだと思われる。そのもう一つの層は、哲学的もしくは形而上的とも呼び得ると思うが、それを形成している主な要素は、語り手の独白と、語り手とプラトンの対話である。この作品の多層構造は、語り手の設定と、アル中の哲学者プラトンによって、主に支えられている。

真の教養人でありながら完全なアルコール依存症で、世間を棄てて破滅へとつき進んでいるプラトンと、アルコール類を口にせず毎晩ミルク一杯で夜のパリを生き抜く語り手は、対照的な存在である。その対照のあまりの見事さゆえに、プラトンは語り手の alter ego として創られた存在ではないかとも感じられる。しかし、実は『夜の道路』の登場人物には、すべて現実のモデルがいるとされている<sup>xxvii</sup>。特に重要な二人の登場人物ラルディとプラトンはモデルが特定されており、モデルとなった高級娼婦ジャンヌ・バルディと、現実にはソクラテスと呼ばれていたアル中の浮浪者は、どちらも当時のパリで有名な人物であった。作品中でラルディはみじめな孤独死を迎え、プラトンはアルコール依存症を悪化させ、語り手との話もままならない状態に沈んでいくが、それはモデルとなった現実の二人の運命をなぞったものであった。外国人として知識人として幾重にも社会から疎外されている語り手は、それでも夜のパリで話のできる相手を見出すのだが、その相手は悲惨な破滅の道を歩むのだ。

『夜の道路』は、亡命ロシア人の深夜タクシー運転手という視点から、1930年代のパリを見つめた作品である。視点の特異さ、夜のパリに生きる人々の実態や亡命ロシア人群像の描写の巧みさなどの点で、ユニークな大都市小説である。これはガズダーノフの全作品の中でも優れた作品であり、第一次亡命ロシア文学の若い世代の成果を示す作品と言ってよい。しかし、すでに述べたように、第二次大戦の勃発とドイツ軍のパリ占領をきっかけに、亡命ロシア社会の出版活動は停止した。20年間も発行されてきた「現代雑記」も1940年に第70号で幕を閉じ、同誌69号から掲載がはじまっていた『夜の道路』も発表の場を失った。1952年に単行本として刊行されたので、ガズダーノフの同時期の作品よりは幸運であった。しかし、雑誌連載の中断から単行本の発行まで、第二次世界大戦をはさむ10年以上が経過する間に、作品を受け入

れる亡命ロシア文学界の状況は、まったく違うものになっていた。

## おわりに

ガズダーノフが夜間専門のタクシー運転手になったのは1928年なので、彼が『夜の道路』で描いたのは、主に1930年代のパリであると言えるだろう。1920年代のパリには、世界中から芸術家が集まっていた。美術、音楽、演劇、映画、ファッションなどあらゆるジャンルで、華やかな文化がパリを中心に花開いた。文学に関して言えば、1920年代のパリでアイルランド人ジョイスは『ユリシーズ』を完成させ、アメリカからはフィッツジェラルド、ヘミングウェイなど多くの作家がパリの魅力に引かれてやってきた。1929年にはじまった大恐慌によって、「狂乱の時代」と呼ばれた20年代は幕を閉じ、1930年代は不況と危機の時代となった。しかし、この時代にもパリは、たとえばセリヌ『夜の果てへの旅』(1932)、ヘンリー・ミラー『北回帰線』(1934)のようなすぐれた文学表象を生んだ。また今橋映子は著書『パリ・貧困と街路の詩学 1930年代外国人芸術家たち』において、この時代にパリにいた外国人芸術家たちが、「知られざる傑作」とも呼ぶべきパリ表象を創造したと述べている<sup>xxviii</sup>。

ガズダーノフもまた、1930年代にパリにいた外国人芸術家として、彼特有の視点でユニークなパリ表象を残した。しかし、第一次亡命ロシア文学の成果は、ロシア文学のみならず世界の文学においても、長く見落とされてきた。「見落とされた世代」の代表であるガズダーノフの文学は、いまだに様々な観点からの研究を待っている。

## 注

- i *Варшавский В.С.*, Незамеченное поколение, Нью-Йорк, 1956.
- ii *Газданов Г.*, Собрание сочинений в 3 т., М., 1996. ガズダーノフ作品の引用はこの版に拠り、( ) 内に巻数と頁数を記す。
- iii 白軍のガリポリ駐留の実態と文化的意義について、日本では次の研究がある。諫早

- 勇一「ガリポリ — 異境の成立」, 科学研究費補助金研究成果報告書「辺境と異境 — 非中心におけるロシア文化の比較研究」No. 1, 2010, pp. 10-17. ガズダーノフは短編小説『三つの失敗の物語 Повесть о трех неудачах』(1927)で、断片的ではあるがガリポリでの経験に触れている。
- iv *Газданов Г.*, Собрание сочинений в 5 т., М., 2009, С. 488.
- v *Берберова Н.*, Люди и ложи. Русские масоны XX столетия, Харьков, М., 1997, С.146.
- vi 『フランスの地で』はガズダーノフ唯一のノンフィクションである。1946年にフランス語版が発行された (Je m'engage a defender. Paris: Defense de la France. Ombres et Lumieres, 1946)。1975年にオリジナルのロシア語版 («На французской земле») が発見された。作品集の注には次のように書かれている。「ガズダーノフのこの書は、明らかにソ連の学者には知られていなかった。ソ連のパルチザンがヨーロッパのレジスタンス運動に参加したことに関する、実に初めての研究である。」(*Газданов Г.* Собрание сочинений в 3 т., Т.3, М., 1996, С.839)
- vii Возвращение Гайто Газданова. Научная конференция, посвященная 95-летию со дня рождения, 4-5 декабря 1998 г, М., 2000, С.6.
- viii 3巻作品集 (注 ii) には 36編, 5巻作品集 (注 iv) には 41編の短編が収録されている。
- ix *Набоков В.*, Собрание сочинений русского периода в 5 т., Т.4, СПб., 2000, С.535. *Nabokov V.*, *A Russian Beauty and other Stories*, McGraw-Hill Book Company, New York, 1973, p. 31. ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ短篇全集II』(作品社, 2001年)所収の毛利公美訳「動かぬ煙」を参照した。
- x モーパッサン『オルラ』小佐井伸二訳, 集英社ギャラリー [世界の文学] 7 フランスII, 集英社, 1990年, p. 1056.
- xi *Газданов Г.*, Собрание сочинений в 3 т., Т.3, С.804.
- xii *Газданов Г.*, Собрание сочинений в 3 т., Т.1, С.11.
- xiii ガズダーノフが「偶然性」の要素を作品に多く持ち込むのは、自分自身の人生が偶然性に左右されたという意識から来ている可能性もある。20年以上も続けたタクシー運転手という職業についても、「ばかげた偶然のせいで私はタクシー運転手にならざるを得なかった」(1, 465)と述べている。
- xiv A. S. マカレンコ (1888-1939) はソ連の教育家。非行少年の矯正施設での教育経験に基づいて、集団主義教育理論を展開した。『巡礼』の登場人物ロジェは、若年犯罪者の問題に関わっているので、マカレンコに例えたもの。
- xv *Красавченко Т.Н.*, Газданов и масонство//Возвращение Гайто Газданова, С.144.
- xvi *Красавченко Т.Н.*, Газданов и масонство//Возвращение Гайто Газданова,

- C.150.
- xvii 吉村正和『フリーメイソン 西欧神秘主義の変容』, 講談社現代親書, 1989年, p. 70.
- xviii *Струве Г.*, Русская литература в изгнании. 2-ое издание исправленное и дополнительное, Paris, 1984, С.293–294.
- xix *Окутюрье М.*, Русский Париж в творчестве Газданова//Гайто Газданов и «незамеченное поколение»: писатель на пересечении традиций и культур. М., 2005, С.135.
- xx *Красавченко Т.Н.*, Газданов//Русские писатели 20 века. Биографический словарь, М., 2000, С.172.
- xxi *Менегальдо Е.*, Русские в Париже 1919–1939, М., 2001, С.8.
- xxii *Менегальдо Е.*, Русские в Париже 1919–1939, С.181.
- xxiii *Менегальдо Е.*, Русские в Париже 1919–1939, С.185.
- xxiv *Бальзамо Е.*, «Ночные дороги» Гайто Газданова//Гайто Газданов и «незамеченное поколение». С.140.
- xxv *Бальзамо Е.*, «Ночные дороги» Гайто Газданова//Гайто Газданов и «незамеченное поколение». С.141.
- xxvi *Проскурина Е.Н.*, Единство иносказания: о нарративной поэтике романов Гайто Газданова, М., 2009, С.197.
- xxvii *Газданов Г.*, Собрание сочинений в 3 т., Т.1, С.704.
- xxviii 今橋映子『パリ・貧困と街路の詩学 1930年代外国人芸術家たち』, 都市出版, 1998年, p. 41。